

願生

如來雄之

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで！ —



生きる課題

先程、感話で大事な話がありました。「自分の身を引き受ける、死ぬことを引き受ける」ということは本当に難しく、そこに私たちの大事な生きる課題があるということを教えていただいたように思います。

仏教の一番大事な言葉

私は、仏教は理屈として何にも難しいことはない、と思っ
ています。「今、ここに、このよ
うな自分として、さまざまな他
者とともにある」、このわが身
の事実を正しく受けとめること
が私たちは、実際は思いでこの
身の事実を解釈して生きていま
す。身の事実を思いで生きてい
る、これを仏教では迷いという。
この迷いの心でみずからを傷つ
け他を傷つける世界をつくりあ
げています。これを娑婆と呼び
ます。自分に与えられた身を正
しく受けとめること、それ以外
に仏教の課題はない。「あなた
の身の事実、これだけがあなた
が帰って行く大地です。思いを
どれだけ積み重ねても、身の事

実には帰れませんよ。身の事実
からの呼びかけ、それをきちんと
聞いて下さい。「この呼びか
けが南無阿弥陀仏です。だから
南無阿弥陀仏が私たちにとって
もつとも大事な言葉なんです。

認知症になってお念仏が 出なくても救われますか

奈良に私財を投げうって仏法
道場（大和仏教センター）をた
てられた夫妻がおられます。そ
の夫人が寝たきりになってから、
お念仏も出なくなるのではない
か。お念仏が出なくても、私は
救われるのでしょうか」と。皆
さんは、どう答えますか。よく
考えてみましょう。自分が念仏
できなくなったら救いがあいま
いになるような念仏は、自力の
念仏ではありませんか。私たち
にとって大事なことは、私ごと
のようになっても、如来からの
呼びかけにあるという身の事実

南無阿弥陀仏のみぞまこと

加来雄之先生

（大谷大学教授）

2019年9月14日

命終えられるまで「ベッドサイ
ド法話会」をしました。その夫
人が私にこう問うてくださいま
した。「私は、お念仏さえあれ
ばどんな人生でも大丈夫と聞い
てきた。そして実際、私はいろ
んなことがあったけど、お念仏
して生きてきた。でも寝たきり
になって認知症が始まった。あ
れだけ感動した先生の言葉も思
い出せない。娘の顔さえ忘れる

「たすく」と「すくう」

親鸞聖人は、仏様の救済には、
「助ける」と「救う」という二
つのことがあると教えて下さっ
ている。南無阿弥陀仏の願いに

気づかせることを「助ける」と
いいです。私たちの思いの世界
の全体を南無阿弥陀仏の光りに
よって照らしていく、これを
「救い」といいます。難しい言
葉で言うところ「回向」と「摂取」
です。

「安心」を「あんしん」とよ
むときは不安がないことです。
それに対し「あんじん」とよむ
ときは心をしつかりと仏様の智
慧の上なたてることです。それ
が「たすく」です。そうすれば
不安があってもなくても仏様の
智慧の中で生きていきます。そ
れが「すくう」です。事実を事
実のままに受けとめていく仏様
の智慧をいただくということが
「たすけられる」ことです。そ
の智慧によってこの人世を生き
ることが「すくわれる」という
ことです。仏教の救済といつて
も、たつたそれだけなんです。
ただそれが思いに生きる私たち
にとっては本当に本当に困難な
ことなのです。

法然上人は、南無阿弥陀仏に
よって仏様の世界に往くことを
大事にされて「念仏往生」と教
えてくださいました。親鸞聖人
は、それを受けとめて、南無阿

弥陀仏によって浄土に往くとだけでなく、南無阿弥陀仏の呼びかけのなかでわが人世を生き尽くしていくこと、つまり穢土に還る意味があるとされ、それを「念仏成仏」という言葉で表現されたのです。私が凡夫をやめて仏になるのではありません。それは自力の成仏でしょう。私たちが凡夫のままに仏様のはたらきを証明する。これが他力の成仏でしょう。

仏教のビッグバンをあらわす南無阿弥陀仏

「南無阿弥陀仏」という言葉を出すことがどうして救いになるのだろうか、と問われることがあります。私はそのことについていつも思いつくのは、お釈迦様が最初に説法されたときの言葉です。お釈迦様は五人の比丘に対して「私のことを友と言ったり、ゴータマと姓で呼んではいけない。私は如来である。正しく覚った者である」と宣言されます。これが仏の教えの出発点です。僕はこれを宇宙の

誕生になぞらえて仏教のビッグバンと呼びます。仏教はそこから出発して、さまざまな苦悩にちかえて、やがて八万四千の法門になった。ところが弟子たちの中に、私はこれだけ修行した、私はこれだけ学んだから悟れるはずだ、というような自力の誤解が出てきた。それをひっくり返すために生まれてきたのが他力の教えです。私の修行や学問によって救われるのではない。救われるのは如来の呼び声に目覚めることよってである。そのことをはつきりとするために『大無量寿経』というお経です。広く言えば浄土三部経です。『大無量寿経』は、なぜ南無阿弥陀仏という言葉が生まれてこなければならなかったのか、その歴史を本願として明らかにしてくれているお経です。

じめて出てくるのです。親鸞聖人は、この仏教のビッグバン、「如来」としての名のりをあらわすのが南無阿弥陀仏であると教えてくださったのだと思います。

なぜ、念仏で救われるのか

南無阿弥陀仏を称えるにについては、どのような条件も能力も問わないでしょう。誰でも出来る行です。誰でも出来るなら、価値なんかないんじゃないか、という疑問も出てきますね。しかし、どのような条件も必要のない行だからこそ、あらゆる人間の価値や能力を超えたわが身、如来に呼びかけられるわが身を表すことができる唯一の行なのです。

私は、南無阿弥陀仏という言葉に出会うことでどのような生き方（救い）が与えられるのかについて、アウシュビッツという強制収容所を生き抜いたV・フランクル先生から非常に大きな指針を与えられました。その方が、人間の価値に三つあるという。一つ目が創造価値、二つ目は体験価値、もう一つが態度価値です。

そのなかの態度価値とは、「自分に与えられた運命、自分に起こってくる人生の問題を引き受けるという態度、そこにこそ人間としての根源的な価値があるんだ」と教えてくださいました。でも、どうすれば誰もが平等に態度価値を実現できるかということについてフランクル先生はおっしゃっていません。私は、その態度価値を誰もが平等に実現するための行が、念仏、南無阿弥陀仏だと思えます。

「ただ念仏」

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏という名号を、「因位」の「名」と「果位」の「号」とに分けられます。私たちの迷い苦しみを悲しみ担うすべての言葉の根源にある南無阿弥陀仏、これが法蔵菩薩としてあらわされる



如来の因位の南無阿弥陀仏です。そして、迷っている私たちの無明を破り煩惱を転じていく様々な智慧の根源にある南無阿弥陀仏が、これが如来の果位の南無阿弥陀仏です。清沢先生は「我等の大迷は如来を知らざるにあり」と教えてくださいましたが、南無阿弥陀仏によって、私たちは仏教の根源にある如来のおこころに出遇うことができ、この人世を如来によって生きていくことができるのです。その意味で、南無阿弥陀仏こそ「まこと」真実の言葉なのです。

聞き書き担当者・感想

加来先生は、法話は生き物であるとおっしゃられました。私は、松本知代さんの感話を縁に説かれた私への対機説法だと感じました。「自分に与えられた身を本当に受けとめるといことが、仏教の一番大きな課題なんです。」この言葉を大事にしていきたいと思います。

南無阿弥陀仏 積和敬